



2015～16 年度
国際ロータリー会長
K. R. ラビンドラン

Weekly Report Niigata



世界へのプレゼントになろう

2015～16 年度 国際ロータリーのテーマ



2015～16 年度
新潟ロータリークラブ会長
竹石 松次

新潟 RC2月第 4例会 (2016.2.23) No.3123

(1) ロータリーソング「それでこそロータリー」斉唱

(2) 竹石 松次 会長挨拶

宮 終二

大正元年 (1912) ～昭和六十一年 (1986)

魚沼市 (旧北魚沼郡堀之内町) に父・保治、母・ツネの長男として誕生、本名肇 (はじめ)。

父・保治は、書店を経営する一方、自ら雑誌「三峡」を発行するほどの文学好きの一家で、兄弟は、第二人、姉妹二人の五人兄弟姉妹であった

叔父に画家、宮芳平がいた関係で、幼少のころから文学、絵画への関心が高く、中学生時代から短歌に親しんでいた。

大正十四年、新潟県立長岡中学 (現・長岡高校) に入学、家からは、上越線を使つての列車通学であった。

一家が、商売上衰微して行く状況を目にする一方、文学への探求心は募るばかりであった。当時の生家を巡る経済的環境、上越線開通で、堀之内の経済的地位の低下が大きく影響していた。

中学四年時、佐渡の修学旅行で、感想文を課せられた際、作文ではなく、短歌二十首を詠んで提出した。担当の先生は、叱るのではなく、逆に褒めたことが強く印象に残った。

この経験で、肇少年は益々短歌を好きになり、後日の『歌人』誕生の契機になった。

この頃、既に活躍していた、会津八一の「南京新唱」にも触れ、歌の世界に一層係りあう環境を形成した。また、この頃、歌人・相馬御風門下の滝沢晴雄に勧められ、糸魚川で

発行されていた御風主宰の「木陰歌集」に投稿、二十回を超える採用となった。

昭和五年、長岡中学卒業後、進学を断念し、家業の書籍店を手伝う道を選択する。

「吾一人孤独と思えばさびしかり

一人出でて来て冬の陽を浴ぶ」

やがて、中学時代の上越線で知り合った五歳年下の女性に恋し、駆け落ち同然の北海道旅行に行っている。しかし、成就ならず青春の苦い経験であった。この時の気持ちを詠んだ歌が残されている。

「君と共に渡りし夜の

津軽の海潮なりの音耳に残るを」

昭和七年、二十歳なった肇は、住み慣れた故郷を後にし

て上京する。

この時、父は、「私の決心が変わらないと覚えると、父は私を土蔵の一室に呼んで、神棚の前に座らせ、別れの盃を酌んだ」と、親子の別れの場面を振り返っている。

東京では、新聞配達、額縁配達、出版社事務員など様々な職業を転々とする。

上京した翌年の春、意を決して、かねてから尊敬し、慕っていた歌人・北原白秋を訪ねる。幸い面会することが出来た。

新潟の「北越新報」は、毎年、新年文芸を募集しており、肇は、東京から「櫻子」の名前で投稿していた。その選者が、名前が知れ渡っていた白秋で、選者の中には、短歌・相馬御風もおり、人気を博していた。

投稿のことを白秋に話すと憶えており、白秋は「投稿名が女性のような名前だったと指摘した。

そして、「今度来る時は短歌を何首か持ってくるように」と指示され、以後、月に二回訪問することを許された。すでに宮終二と名乗り歌壇に加わっていた。昭和八年、白秋、四十八歳、終二、二十一歳であった。

北原白秋は、明治、大正、昭和に業績を残しており、早稲田大学を卒業後、雑誌「スバル」、詩集「邪宗門」、歌集「桐の花」そして、「赤い鳥」では童謡や民謡を発表している。

童謡「砂山」「海」など多くの歌を作っている。

「すなやま」は、新潟の砂浜を詠ったもので、大正十一年、新潟市の開かれた音楽会に招待され、歓迎を受けた後、寄居浜に足を延ばした。

暮れかかる日本海、砂浜、松林がある新潟海岸の情景は、九州の柳川に生まれ育った白秋に大きな感銘を与え、帰宅後詩に書いて新潟の子ども達に贈ったもので、中山晋平と山田耕筰が曲を付けた。新潟市の護国神社の境内に石碑が建っている。

その白秋に弟子入りした終二は、昭和十年春、白秋が主宰した「多磨」の創刊直前に秘書として活躍、下宿先から白秋の自宅に通い、詩集の発行にあたったほか、作品合評会では、評者として作品の選定にあたっている。

白秋は、その後、糖尿病が進行し、芽に異常を訴えたた

め病院に入院、原稿も思うように行かなくなり、菊子夫人と二人での口述筆記をしなければならなかった。

昭和十四年、国家動員法が公布され、戦争の足音が迫っていた。

その後、宮家は、一家で上京し、父や家族も、職を得て生活をしていた。

終二、二十七歳、白秋の秘書として勤めていたが、自分の能力に限界を感じたことと、家族の面倒をみなければという長男としての役割を果たすため辞職を申し出る。

だが、白秋の引き止めにも応じず、年老いた父の面倒を見なければという使命感から、秘書五年で去ることになった。

そして、川崎の富士製鋼所（後・日本製鉄と合併）に入り、工場新聞の創刊と編集にあたった。その二か月後、召集令状が届けられた。

入隊は、高田第三十連隊と決まった。白秋の主宰した「多磨」の編集部が壮行会を開いてくれた。友人に贈った色紙には、

「てのひらの熱きいくつを握りしめ
わかれきにけり数寄屋橋町」

出征直前、師である北原白秋の自宅を訪ね、「宮は短気だから、戦地へ行っても自分から死を急いではいけない」、と諭された。この時、白秋が庭で撮影した写真が残っており、白秋とは最後の別れとなった。着物姿の白秋、軍服姿の終二ら九人が、日の丸を背景に記念写真を撮った。

出征、戦地中国での任務、戦場の悲惨さ、帰還、妻・歌人、英子との結婚、歌集「コスモス」の発刊、宮終二の足跡は、波乱の生涯であった。

昭和六十一年十二月、七十四歳の生涯を終えた。

時々に、短歌で表現した終二の生涯は、不幸な戦争体験が色濃く反映されている。晩年は、「コスモス」を主宰、歌壇で大きな影響力を発揮した。

昭和五十二年、芸術院賞受賞、新潟日報文化賞、紫綬褒章、堀之内名誉町民。平成四年、魚沼市に宮終二記念館開設された。

ふるさとが織り込まれた多くの校歌も作っている。

「地の上に 清くうち立ち
父なる 弥彦山
黙々と つねに見守る
この窓に われら学ばむ
北越高校 われらが母校」
校歌 新潟私立北越高等学校

(3) 2月23日例会の出席率 61.29 %

会員数99名（出席免除会員 9名）

出席者57名（出席免除会員3名を含む）

(2週間前メーク後 81.91 %)

3月8日の例会予定

「新潟ローターアクト活動報告」

ロータリー創立記念旧新潟市内7RC合同例会・懇親会

2016年2月23日（火） 於：ホテルオークラ新潟

18:00 登録開始(受付) 各クラブ受付担当者

ホスト=新潟万代RC

◎司会、進行= 親睦委員長 奥村博光 新潟万代

18:30

1. 点 鐘(開会) 7RC本年度会長
2. 斉 唱 国歌「君が代」ロータリーソング「奉仕の理想」
3. 握手タイム
4. 会長挨拶 (ホストクラブ)会長:伊藤秀夫
5. 米山奨学生・カウンセラー紹介
6. 山本ガバナー挨拶
7. 新保ガバナーノミニー挨拶
8. 次年度ガバナー補佐挨拶

各クラブ次年度会長・幹事紹介 新潟西RC 馬場伸行

9. 点 鐘(閉会) 7RC次年度会長

<懇親会>

19:00

1. 開宴の挨拶
新潟万代RC前年度会長 吉田 栄一(新潟万代)
2. 乾 杯 特別代表 神成肅一新潟西)

19:30

3. アトラクション ～ ハワイアンフラダンス ～

20:40

4. ロータリーソング「手に手つないで」
5. 新潟北RC創立 40 周年について
創立 40 周年記念式典副実行委員長 野沢 正信
6. 次年度開催ホストクラブ会長挨拶
新潟RC会長 竹石) 松次
7. 閉宴挨拶 新潟万代RC次年度会長 小山 恒弘